

180. 抄網すいあみ二題

1. 尾上浜遺跡出土の抄網^①

湖北町尾上所在の湖底遺跡「尾上浜遺跡」から弥生時代のものと考えられるヤナが検出された。このヤナは川を一直線に仕切り、川岸付近に漁獲部を設けるノボリヤナで、現行あるいは近年まで稼働していたヤナのうち、宇曾川タイプや、いわゆるカトリヤナと呼ばれるものに近いと考えられる。またヤナの検出遺構面は細かな砂礫質であることや、湖に近い部分に設けられていることから、漁獲の対象となった主な漁は、アユ、ハス、ウグイ、ニゴイ、ビワマス等であつたろうと考えられる。

ここで紹介する抄網は、ヤナを構成する杭にひっかかった状態で検出されたもので、自然木を利用した2材組合せ式のA-2もしくはA-3型式^②のものである。これを復原すると図-2のようになり、その大きさは、枠部分の最大長120cm以上、網全体としては200cm以上のものが想定されよう。

この網の使用法については想像の域を脱し得ないが、目合の大きな網地を着け、礫底質の河川で用いた場合は、ウグイ、ハス、ニゴイ、ビワマス等を獲るヤナに付随する副漁具として、泥底質の止水に近い状態で用いた場合、コイ、フナ、ナマス等を獲る主漁具としての用法が考えられる。また、目合の細かな網地を着けた場合は、アユを獲るためのヤナに付随する副漁具も

しくは、オイサデアミのような主漁具としての用法が考えられよう。

春から夏にかけて、湖から大量にのぼって来るアユは、尾上浜人の食卓を豊に彩ったことであろう。しかし、来る日も来る日も食卓にのぼるアユとその加工品に食傷しブツブツ言う子供や男たち、そしてそれをし



図1 尾上浜遺跡および安曇川水系位置図

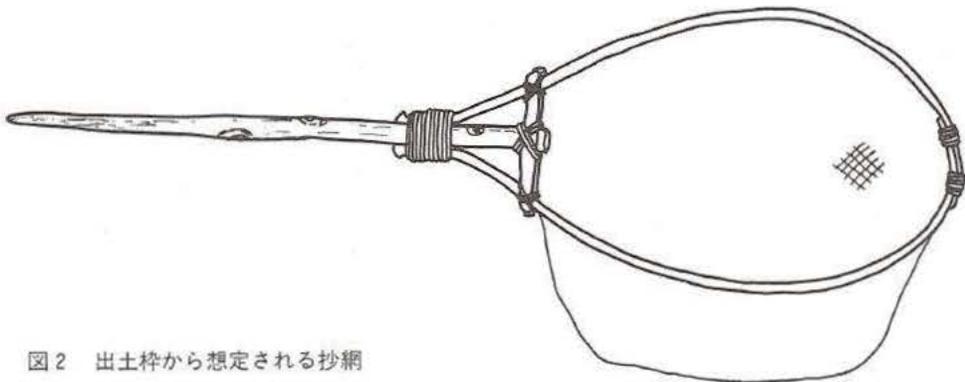


図2 出土枠から想定される抄網

かりとばす女達の姿もまた私の目の中に浮んで来る。

2. 安曇川源流域の抄い網

湖西地方最長の川安曇川は、比良山系をはじめとする山々の水を集め、琵琶湖に流れくだる。その支流のひとつ京都市左京区久多に流れを発する久多川流域で用いられていた抄網を見る機会を得たので紹介したい。久多の人々が漁場とした久多川の河川形態は、おおまかA a型～B b型として捕えられる^③。棲息する魚類はウグイ、アユ、ドマン(ドンコのたぐい)、マス(ピワマス)、アマゴ、イワナ等である。

①～③はB-O型式の抄網の未製品で、民家の軒下に稲杭等と一緒に保管されていたものである。いずれも対生する針葉樹の枝を丸く曲げ、稲藁で固定している。いずれも樹皮は取り除かれている。把手の端部は削りにより整形される。また、節の部分も削りにより整形される。大きさは大・中・小の3種類あるが、いずれもドマンを獲るために作ろうとしたものであるとのことである。これらの網杵は、低湿地遺跡から出土するB-O型式のものと同じ形態を持っている。すなわち、琵琶湖の最源流部と最下流部と同じ形態の漁具が用いられているわけである。このことから、漁は、漁具により規制されるのではなく、漁場環境により規制されることがよくわかる。

④は、B-1型式の抄網で、又状の自然木を軸とし、竹棒の杵を装着したものである。網地は失なわれている。軸の先端が劣っていることから、本来はこの部分に竹の柄を着けて就漁したものであろう。また、杵の内側に網地を通すために用いられたと考えられる紐がめぐるっている。この網が何を獲るために用いられたのかは不明とのことである。

⑤は、針葉樹の自然木を利用したB-1型式の網である。網杵部と軸の角度は約135°を測る。杵の先端部は、番線により結束される。また、杵の内側には網地を通し、さらに杵に固定するための竹ヒゴがめぐるっている。この網も④と同様に竹等の長い柄を着けて用いたものである。

この網は、河川が大増水した時、急流から身を守るために淀みに集まったアユ等を岸の高場から、抄い取るために用いたものである。

(大沼 芳幸)

註

- ① (財)滋賀県文化財保護協会の小竹森直子氏の御教示による。
- ② 大沼芳幸 「魚獲りって難しい。—抄網の機能と形態—」 (『紀要第1号』(財)滋賀県文化財保護協会1988)
- ③ 可児藤吉 「溪流棲昆虫の生態」1944

